

第二世代の教育達成をめぐる問題

—ブラジル人の若者たちの事例から—

山本 かほり

1. はじめに

2007年12月末現在の外国人登録者数は約200万人を超えている。そのうち140万人以上が1970年代以降に来日したニューカマーと呼ばれる人々である。かれらの人口は一貫して増加しつづけており、特に、1990年の入管法改正以来、ブラジルやペルーなどの南米の日系人およびその家族の増加が顕著なことは周知の事実である。その数は、ブラジル籍31万人強、ペルー籍6万人弱（いずれも2007年12月末法務省統計）と全外国人の20%を占めている。

彼ら彼女たちは、日本での活動制限が少ない滞在資格を得ることができるために「合法的」な単純労働者として日本社会に登場した。彼ら彼女たちの目的は「デカセギ (dekassegui)」であり、短期でお金を稼ぎ帰国していくものだと考えられていた。

しかしながら、入管法改正後15年以上が経過した現在、様々な事情から滞在が長期化し、なかなか帰国の契機が見つからないブラジル人たちが増加していることも事実である。2006年に浜松市の国際課が行った調査では、調査対象者1253人中4割強が滞日9年を超えていた。また、家族をともなう滞在大多数で、「単身」は14%ほどだという結果が出ている。

筆者らが行ったⁱ愛知県西尾市（2007/8/1現在 外国人人口比率=5.49%）の県営住宅に居住するブラジル人（若干のペルー人を含む）対象の調査でも、そうした傾向は確認できるⁱⁱ。

i 2001年4月より愛知県西尾市において調査を継続している。調査対象とした3県営住宅は、ブラジル人を中心にして、外国籍住民の増加が顕著な住宅である。外国人比率は約3割から6割にのぼり、特に、県営X住宅は、比率だけで見ると、県内でもっとも外国人比率が高い住宅である。詳細は、松宮（2003, 2004a, 2004b, 2005a, 2005b）、山本（2003, 2004a, 2004b, 2005, 2006）および山本&松宮（2006）などを参照のこと。

表1：外国人集住団地・外国籍住民調査（西尾市）

	県営X住宅	県営Y住宅	県営Z住宅
調査年	2001年8-9月	2003年7-8月	2004年9月
平均年齢	36.8歳	39.6歳	36.1歳
日本での平均居住年数	7.0年	10.0年	8.2年
西尾市での平均居住年数	5.5年	6.4年	6.0年
住宅での平均居住年数	3.1年	5.7年	3.1年

また、日本に無期限に在留できる「永住者」（一般永住）の取得者も年々増加傾向にあるⁱⁱⁱ。

表2 永住（一般永住）資格取得者の推移（参考に定住者の推移を付した）

年	2000		2001		2002		2003		2004	
	全体	ブラジル	全体	ブラジル	全体	ブラジル	全体	ブラジル	全体	ブラジル
永住	145.336	9.062	184.071	20.277	223.875	31.203	267.011	41.778	312.964	52.583
定住	237.607	137.649	244.46	142.082	243.451	139.826	245.147	140.552	250.734	144.407

こうした傾向をとらえて、ブラジル人の日本への定住が進展しているという議論が、1990年代後半から行われている（たとえば駒井）。しかしながら、同時に、定住に対して慎重な立場をとる議論も一方である（たとえば梶田ら）。たしかに、私たちの前述の西尾調査で、今後の滞在予定をたずねると「わからない・未定」とするものが大多数であった。

前述の浜松市調査においても「できるだけ長く日本に滞在して、いずれは母国に帰る」という回答が4割近くで最も多く、日本での永住を明確に決めている人は6%弱であった（浜松市、2007:54）。しかしながら、現実問題として、帰

ii 県営住宅など、公営住宅に居住するには、家族単位での入居が条件となっている。したがって、本調査の対象者になった人たちは、学齢期の子どもを持つ人たちも少なくなく、そうしたことを理由として、会社の単身寮などに居住しているケースよりも、滞在が長くなる傾向にある。

iii 永住者が必ずしも日本への永住を決心しているとは限らない。更新の必要がなく、便利だからという理由で取得している者も多い。また、1998年から永住資格の取得要件が緩和され、日系人にとって、取得は容易であることも、永住資格の取得を促進させた。

表3：今後の日本滞在予定

日本滞在予定	県営X住宅	県営Y住宅	県営Z住宅
3年以内	4.3%	14.9%	2.4%
3-10年	13.0%	12.2%	12.2%
永住	9.8%	10.8%	0.0%
不明	72.8%	62.2%	85.4%

国できるのかというと、困難は多い。

「日本にきた頃は2年頑張って、お金を貯めてブラジルで何かやろうって思っていたけれど。でも、ダメだね、こっちでの生活に慣れると、頑張って貯金する気持ちも薄くなって、色々なものを買ってしまう。ブラジルでは仕事しても買えなかったものが、日本ではちょっと頑張れば買える。車やステレオやビデオやテレビ。日本での生活を楽しむようになったから、なかなかブラジルへ帰ることができなくなったね。ブラジルへ帰ってもやることないしね。俺は勉強していない(学歴がない)から、ブラジルでは仕事がない。商売をやろうって思っていたけれど、何やるかも決めていないし、できるものもない。いつかは帰りたいんだけど。」(2003/9/15 県営Y住宅)

「日本に来て、15年になる。夜勤、休日、残業、いいね(あるとうれしい)。定時、困る(残業代がつかないから)。ブラジルには一度も帰らずに、我慢して、我慢して…。家を2軒、ブラジルに買った。息子が(ブラジル人学校の)高校出たら、帰ろうと思っていました。でも、家だけでは生活できない。(ブラジルには)仕事ない。あと3年で帰ることができるかわからないね。子どもも日本生まれ。ブラジル人学校で高校まで出ても、その後がどうなるか心配です。」(2005/5/22 県営Y住宅)

このような現実をうけて、現在、もっとも「問題視」されているのが、第二世代(子ども)の教育問題である。親たちの将来の予定が定まらないために、

「子どもが日本での勉強に身が入らない」「いずれはブラジルに帰ると思っているために、日本での教育を重要視しない」などの批判は学校関係者から頻繁にため息まじりに聞かされる。同時に、日本での生活が長期化する中で、第二世代の多くが日本で成長し、母国への帰国が非現実的となってきたと理解されている。しかしながら、第二世代が日本社会で今後どう生きていくのか？その術を身につけるための教育をどうするのか？たとえば、日本語保障、学力保障、進路保障、さらには不就学の問題など、困難な問題が山積されている。

実際、2007年10月16日付けの「中日新聞」によると、浜松市の調査では、ブラジル人生徒の市内の高校進学率は70%前後、2006年度の市内中学卒業生91名中、全日制県立高校へ21人、定時制高校へ22人、就職は2人、残りは「帰国・家事手伝いなど」だという。ただし、このデータには相当数いると考えられている「不就学」の子どもたちは含まれていない。不就学の子どもたちの数を把握することは困難ではあるが、ブラジル人が集住する地域では、中学校相当年齢で就労している子どもたちの現状も報道されることもしばしばあることから、中学を終えることなく、学校からドロップアウトしていく子どもたちもかなりいると考えられる。

しかし、反面、まだ、数は多くないが、短大や大学に進学して、保育士や高校教員になった者（または、教員をめざしている者）、ブラジル人のための日本語教室を開講している者、自分の希望した職種がある会社に内定をとったもの等々、日本で自分の将来を切りひらいている若者も出てきている。

本稿では、このような「モデルケース」とでも呼びうる若者たちの事例から、かれらがなぜ困難を乗り越えて、現在の道を拓くことができたのかを考察し、そのうえで、外国人の子どもたちへの教育支援をめぐる課題を考えてみたい。

2. マイノリティの教育達成・職業地位達成

日本における階層研究をリードしてきたのは、1955年から10年ごとに行われてきたSSM（Social Stratification and Social Mobility 社会階層と社会移動）調査である。その中心的な争点になってきたのは、世代間移動の分析、地位達成過程の分析であり、出身階層が個人の移動に与える不利/有利を解明することに

あった。ただし、エスニックマイノリティの教育達成、職業地位達成に関するテーマは、SSM調査ではとりあげられることはなかった。その最大の理由は、日本の「外国人」人口比率が他の先進産業国に比較して、相対的に低いことがあげられよう（金・稲月，2000：182）。また、外国人登録原票などを使用しているサンプリングも様々な制約があり、研究者が調査目的に使用することは不可能であることも理由としてあげることができる。

こうした制約があるなかで、金と稲月は、1995年のSSM調査の男性データと「在日韓国人の社会成層と社会意識全国調査」^{iv}（以下「在日調査」）のデータを比較することによって、日本における代表的な定住外国人のグループである在日韓国人の日本社会における階層的な地位を分析している。

金・稲月の分析によると、教育年数、職業（現職）威信、個人年収の平均値を日本人と在日韓国人と比較すると、民族間の格差はほとんど見られないか、むしろ、収入においては在日韓国人の方が高い値を示しているというのである。しかし、職業種を比較すると、在日韓国人のホワイトカラー比率は日本人の半分しかないのに対して、自営の比率は日本人の倍以上だという。金・稲月はこの結果をうけて、在日韓国人が就職差別をうけて労働市場から排除され、概して「娯楽業を典型とする周辺セクターや同胞民族集団を対象とする商い、および高度な知識や資産を必要としない業種」（金・稲月，2000：190）などの周辺の自営業に囲い込まれたのだという。

また、谷富夫を代表とし、筆者もメンバーだった「民族関係研究会」が行った在日韓国・朝鮮人の家族・親族を単位とする「世代間生活史調査」からも、在日韓国・朝鮮人の社会移動に関する興味深い知見を導きだすことができた。

本調査における生活史の分析は多岐にわたるが、本稿のテーマと関連して、筆者が分析を担当したのは、第三世代に医師をはじめとする専門職従事者を多く排出したX家と名付けた親族の生活史である。

金・稲月の分析にもあるように、在日韓国・朝鮮人は、民族障壁ゆえにフォー

iv 在日大韓国民団が保有する名簿を用いて「20歳以上の日本に定住している韓国籍の男性」を母集団として1280名を抽出し、訪問面接調査法にて実施された調査。1995年2月18日～1996年10月31日が実施期間である。

マルセクターから排除される傾向にあるために、職業選択の幅が狭いということがしばしば言われる。「医者か弁護士、もしくは自営業」——これが、在日韓国・朝鮮人社会で繰り返し語られた将来像である。X家の生活史をみると、これを体現するかのように、第二世代は自営業で生計を立て、一定の経済的安定を得ている。そして、その子どもたちである第三世代は高学歴を取得し、医師、通訳、上場企業勤務、公務員などへの上昇移動を果たしているのである。

「高学歴＝専門職で生きる」誰にでも可能ではないが、在日韓国・朝鮮人の生き方の典型の一つであると言うことはできよう。こうした選択を可能にした要因を、X家16名の詳細な生活史から分析を筆者は試みた。そこで明らかにしたのは、日本社会における民族障壁・移動障壁の存在で、上昇ルートが強く制限されている（と認識されている）ため、世代間移動に関しては、親の経済的・文化的階層がもつ意味が大きいということである。また、在日韓国・朝鮮人がある家族・親族の強い絆の中で、第三世代が互いに影響し合い、励まし合い、そして、時には競い合って、難関だと言われる職業に就いていったプロセスも明らかにした（山本、2002）。

さらに、高畑が分析を担当したY家の生活史との対比も興味深い。Y家は日本人からは隔離した在日韓国・朝鮮人の集住地域に居住しており、世代を超えて、「周辺的」な職業に従事している。かれらのネットワークは地域の親族・同胞の相互扶助に限定されており、雇用機会、その他の情報からも疎外された地域において、上昇移動は困難であることが生活史から示唆されているのである（高畑、2001）。

それでは、ニューカマーであるブラジル人の社会移動はどうであろうか。第一世代のほとんどは製造業での非熟練労働に従事している。第二世代には、選択の幅はあるのであろうか。在日韓国・朝鮮人が経験した（している）就職差別はあるのだろうか。また、かれらのアスピレーションはどのようなものであろうか。

これらの問題に関して研究の蓄積は、まだほとんどない。その最大の理由は、日本のブラジル人社会はまだ第一世代が中心であり、第二世代の多くが、まだ学齢期にあることにある。それでも、最近では第二世代の教育をめぐるの

研究が盛んに行われており、その研究結果から示唆される点が多い。

例えば、拝野はブラジル人学校出身の若者の単純労働観を分析している。拝野は、ブラジル人学校就学者や修了者の多くが、親世代と同様に間接雇用による工場労働者になっているという事実をふまえた上で、それでも、「非熟練労働者」の再生産だとみなすことは、かれらのもつ多様性やダイナミズムを見落とすことになると論じている（拝野、2006）。つまり、ブラジル人学校就業者は、日本で「単純労働」に従事することを「成功を可能にする手段」「学業継続のプロセスとして戦略的に活用」しているというのだ。たしかに、インタビューデータやアンケート結果は、拝野のこの議論を説得的なものとしている。しかし、これは、あくまでも本人たちの「主観」であり、実際には本人たちが思い描いた将来像とは遠くかけはなれた生活となるケースも多い。ブラジル人学校で取得した文化資本が日本社会での社会移動には決して有利には働かないという厳しい現実をふまえておく必要がある。

また、日本の学校に在籍するニューカマーの子どもたちに関する研究には、宮島喬を研究代表とする「外国人児童・生徒の就学問題の家族的背景と就学支援ネットワークの研究」（科学研究費報告書・2007）がある。この研究は、外国人児童・生徒の不就学など、山積している問題を家族的背景からアプローチして分析を試みている。

親の「関わり」が子どもの学業的な達成を左右すること、家族的背景の相違により、第二世代の学業達成に差がでていく過程を明らかにした。ブラジル人だけではなく、インドシナ難民、中国帰国者など様々な背景をもった外国人児童・生徒およびその家族を対象とした研究である。

他にも 児島明の「ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー」（2005）は、ブラジル人生徒が集中する中学校における参与観察をまとめたものである。児島は、本書の中でブラジル人の親たちが語る日本での適応戦略、そして、それと関連づけて、日本での学校選択のプロセスを分析した。ブラジル人の親たちが、意図せざる日本滞在の長期化のなかで、日本での生活をどう意味づけているのか、その意味づけ方によって、様々な家庭背景や教育ニーズが存在していることを親たちの語りから分析した興味

深い研究である。

これらニューカマーの子どもたちの教育をめぐる研究からうきほりになるのは、子どもたちをとりまく多くの困難である。「学習言語取得の困難」「家族のサポートの不足」「学校の無理解」「ブラジル人学校出身者の（実質的な）展望のなさ」等々、学校関係者がため息まじりに話すものと重なりあうものが多い。

また、実際に、筆者が調査で出会う愛知県内に居住するブラジル人家族の状況も研究成果を否定するものではない。親たちは、主観的には子どもの学校生活や将来を心配し、気にはかけている。しかしながら、私たちの目からみると、かれらの生活スタイルは結果として、子どもを振り回しているように見えるのだ。

おそらく、親たちの言葉と実態のギャップの背景には、日本の学校制度や社会に対する情報不足およびそこから生まれる現状認識不足が存在することが指摘できるであろう。中学生の中間/期末テスト直前でも家族で遊びに出かけてしまう。親たちは、テストが間近にあることすら知らないし、中学生にとって、定期テストがどのような意味を持つのかもわかっていない。子どもたち自身の認識も不足しているように思われる。

このように、とかく困難ばかりが語られるが、今後、ブラジルの子子どもたちが日本社会で自らの進路を切りひらいていくために、どのような条件が必要なのだろうか。前述の通り「成功例」として考えられる3人のブラジル人若者の事例を中心に検討してみたい。

3. データ

本報告でとりあげる3人の若者たちには、いずれも、報告者が2001年から継続している「ブラジル人住民の増加と地域再編」や「ブラジル人住民の地域参加と社会統合をめぐる問題」と題した研究の中で出会った。前述のように、ブラジル人の第二世代の教育達成や職業地位達成に関する議論は暗いものになりがちである。そのような現実がある中で、大学生活を生き生きと送っていたり、将来への希望や悩みを熱く語るかれらに出会ったときに、何が今のかれらをつくったのだろうかという素朴な疑問がわいた。

この疑問を解決すべく、かれらに生活史のインタビューを行ったり、かれらの活動を見学させてもらったりした。また、可能な場合は、かれらの家族にも聞き取りを行った。さらに、2008年2月17日に愛知県西尾市での「地域の国際化セミナー」に、かれらをゲストスピーカーとして招き、かれらの生き様を語ってもらった。その内容の多くは、それまでの調査データと重なり合うが、その時の話しもデータとして使用することにする。

3-2: プロフィール

① バウロ坂本 (1983年生まれ、大卒。2008年4月より神奈川県立高校教諭(工業化学担当))

1995年、12歳で家族と来日。日本語は全くできなかったため、一学年下げて、横浜市内の公立小学校の5年生に入る。そのまま、公立中学、公立高校、私立大学(工学部)卒業。2年間、臨時採用の教員として勤めた後、2008年4月より、公立高校の教諭として正式採用。家族は両親、2歳下の妹。妹は短大を卒業して、栄養士として働いている。日本国籍取得。現在は神奈川県川崎市在住。

② エドワルド 佐藤 (1986年生まれ 公立大学3年生)

1996年、10歳で父と弟と来日。母親は10ヶ月先に来日。愛知県豊川市内の公立小学校の4年生に入る。日本語は全くできなかった。一度、市内で転校したが、そのまま、豊川市内の公立中学を経て、愛知県立高校から公立大学(外国語学部)に入学。現在、3年生。ブラジル人のための日本語教室を2007年2月から主宰している。

③フェルナンド 佐藤 (1988年生まれ 私立大学2年生)

エドワルドの弟。8歳で来日。兄エドワルドと同じ小学校の2年生に入る。エドワルド同様、日本語は全くできなかった。

豊川市内の公立小学校、公立中学、愛知県立高校(英語科)を経て、現在、私立大学(国際コミュニケーション学部)2年生。兄の日本語教室を手伝いながら、ブラジル人の中学1年生4人の補習もやっている。フェルナンド自身の

関心はブラジル人の子どもたちの学習支援にある。現在、日本国籍取得を考えている。

3-3: 生活史より

(1) 来日

3人ともブラジルのサンパウロで生まれ育った。来日は、親が決めたことだ。3人の母親は日系人であるが、ブラジルではポルトガル語のみで生活してきたので、日本語は「おはよう」も「ありがとう」も知らなかったという。

日本で入った学校は、外国人がほとんどいない学校だったので「最初は珍しかったのか、クラスのみんなは寄ってきてくれたけれど、日本語が全然分からなかったのが、すぐに離れていってしまった」という。

3人とも明るい性格で、ブラジルでは友人も多く、その友だちと離れてしまったのが、何よりも寂しかったと語る。

(2) 小学校へ

3人が通ったのは、ブラジル人が多く在籍している小学校ではなかった。したがって、学校も手探り状態でかれらの指導をはじめたようだ。かれらにとって、来日当初の学校は辛い思い出となっている。

「何を言っているのか、全然わかんないですよ。他に外国人は、僕のいとこのきょうだい(姉と弟)しかいないし。とにかく、わかんないから、座っているだけ。本当に辛かったですね。週一回くらいだったかな、ブラジル人が来てポルトガル語で日本語を教えてくれたんですが、それだけですもんね。」(パウロ)

「週3回くらいかなあ、ブラジル人の先生が来て、ポルトガル語を教えてくれたんだよね。僕も小4だし、フェルナンドも小2だから、ポルトガル語もちゃんとわかってなかったから、勉強が必要だった。文法みたいのを教えてくれた。で、その先生が来ると、ポルトガル語で何でも話せて、僕らの悩みを聞いてもらえたじゃんね。よかった。日本語は、市内のブラジル人がいっぱいいる

小学校まで行って勉強していたよ。」(エドワルド)

「学校に行き始めた頃は、イヤでイヤで、毎日、泣いてましたよ。僕、だいたい、泣き虫で、よく泣いたんですけどね。休み時間になると、エドワルドと会って、二人でなぐさめあっていた」(フェルナンド)

日本とブラジルの生活(文化)の違いにも戸惑った。

「日本人って弁当、きれいに作るでしょ?ブラジル人は肉をバーンっというだけ。友だちにみられて恥ずかしかった。ほかに、6年生の修学旅行。ブラジル人のパンツって結構派手なんです。日本人は白いブリーフだったりするでしょ。友だちに「おまえ、妹のパンツはくなく」って言われて、もう、恥ずかしいのなんの。せっかくの修学旅行が悲しい思い出になってしまった」(パウロ)

「ブラジル人って、身体をさわって挨拶するでしょ。握手したり、肩を抱き合ったり。僕は自然に友だちにやったら、嫌がられた。嫌がるのが理解できなかったよね」(エドワルド)

そして、学校内外でいじめにもあう。町を歩いていて、理由なく蹴られたり、学校内では同級生から日本語の発音を笑われたりしたという。辛いことの連続だったが、それでも、毎日、学校に通い、勉強をあきらめることなく続けることができたのは、親の支えがあったからだ。

「俺は学校に行きたくない、ブラジル人学校へ行きたいって、毎日、泣いていたけれど、母さんは甘やかさなかった。「今はこの道(日本の学校に通うこと)しかない」としか言わなかった。」(フェルナンド)

母親のマルシアも当時のことを振り返って次のように言う。

「ブラジルで生活ができなくなったから日本に来た。だから、私たちには他

に道がなかったんだよね。必死で、先のことを考えることもできない。子どもたちも、それは同じ。どれだけ苦しくても日本で学校に行くしかないでしょ。だから、あの子たちには「他に道がない」って言い続けたよ。

二人は大変だったと思うよ。よく覚えているのは、二人が道を歩いていると、知らない中学生に蹴られたり、殴られたりしたんだよね。「外人、帰れ」って言われたり。ただ、道を歩いただけでだよ。二人は泣いて帰ってきたけれど、私は、「殴る子の方がかわいそう。きっと、家で何かイヤなことがあるから、そういうことするんだ。日本は外国人にまだ慣れていないから、あんたたちをいじめるんだ。そう思って、頑張ってる」って言い続けた。」（マルシア）

エドワルドとフェルナンドは父親も母親と同じ態度だったという。また、父親はイタリア系ブラジル人のために、日本語は全くできなかった（今でもほとんどできない）。来日当初、日本の生活に慣れようと、一生懸命日本語を勉強する父親の姿を見て、自分たちも頑張らないといけないと思ったという。

また、パウロも来日当時、日本語は話せても読み書きができなかった母親が、パウロと妹と一緒に公文に通い、ひらがなから一緒に勉強したことを回想する。一緒に勉強することは大きな励みになったそうだ。

まだ3人とも小学生だったので、口でのみ「努力しよう」「頑張れ」と言われたところで、実行はなかなか困難であったであろう。親が日本語を学ぶ姿を見ること、または一緒に勉強することは、本人たちが日本での勉強をあきらめずに継続する原動力となったと思われる。

(3) 中学時代

小学校を卒業して、3人とも地元の公立中学へ進学した。パウロとエドワルドは、中学でも勉強についていくのは、困難だったようだ。

「僕、小学校時代には成績がつかないんです。日本語も全然できないから、評価の対象外ってことですね。中学になって、はじめて成績がついたんです。日本に来て、たった2年で授業がわかるわけじゃないですね。成績は悪い。

1とかつて、僕、ブラジルでは勉強ができないと思ったことはないから、そりゃ、ショックでした。」(パウロ)

「中学でも授業は全然わからない。友だちと話しはできるようになっていたけれど。」(エドワルド)

ブラジル人の子どもたちが学校からドロップアウトするのは中学時代が多いという報告がしばしばある。中学になると、突然、勉強が難しくなったり、また、成績による順位づけがあるなど、日本での生活が長いブラジル人の子どもにとっても障壁はあるようだ。日本での生活が2～3年しかたっていなかった2人にとって、中学での勉強は本当に難しかったであろう。しかし、2人とも諦めなかった。

パウロは塾に通ったという。なかなか自分に合う塾がなく、苦勞したが、最後にはパウロの進度に合わせて勉強をすすめてくれる塾に出会い、勉強を続けたという。結果、第一志望の高校には落ちてしまったが、第二希望の神奈川県立K高校に合格することができた。

エドワルドは担任がクラス全員に課す漢字テストの成績優秀者になることを目指して、勉強を続けた。「漢字の意味はわからなくて、ただ、写しているだけだったけれど、それでも、(成績優秀者に)名前がのりたくて、勉強したんですよ。担任は3年間同じでだったから、3年間、毎日、漢字テストがあった。僕の前にボリビアの子を受け持ったことがあって、だから、僕のことも理解してくれて」という。さらには、「英語は日本人と同じスタートラインだから、負けたくない」という気持ちで取り組んだので、得意科目になった。

エドワルドが「授業がわかる」と思い始めたのは中3の時だという。「毎日、3時間くらいは勉強していた」という努力が実ったのだろう。中3になってはじめて国語のテストで平均点を取ることができたという。63点だった。そばでエドワルドを支えた担任も喜び、学級新聞に「エドワルド君、国語で平均点突破!」という記事をのせてくれたそうだ。もちろん、エドワルドにとっても大きな自信となり、これをきっかけに、成績はあがっていった。エドワルドも希

望した高校には進学できなかったが、愛知県立M高校（普通科）に進学した。

フェルナンドは、中学ではそれほど苦労しなかったようだ。小5・小6時代の担任に恵まれたことが、成績上昇につながったと母親ともども回想する。厳しい先生で、よく叱られたけれど、ほめる時にはとことんほめてくれた。「ブラジル人だからって、特別扱いは絶対にしなかったけれど、いつも気にしてくれていた」という。社会が苦手だったが、勉強を続けたら、ある日、100点がとれた。その担任の先生は「泣いて喜んでくれた。そこまで喜んでくれたので、俺もうれしかった」という。

フェルナンドの中学時代の成績は「中の上か上の下くらい」で、エドワードが進学したM高校の英語科に進学した。

(4) 高校時代

パウロが進学したK高校は、いわゆる「底辺校」とみなされている学校だった。公立高校であるが、学業的には下位の生徒たちが集まる高校であった。しかし、このK高校での生活がパウロにとって「原点でもあり、大きな転機」となったようだ。

パウロはK高校ではじめてブラジル、ペルー、そして中国帰国者の子どもたちなど、自分と似たような背景をもつ生徒たちに出会う。また、日本人生徒も様々な課題を抱えていた。「本当に色々な人たちが集まっていて、世界は広がった」という。

高校に入学したときから、明確に大学進学希望をもっていた。高校の先生から「日頃の勉強を頑張って、校内で一番をとれば、指定校推薦で大学に行ける」と言われたので、学校の勉強をまじめにこなし続けた。その結果、成績は10と9ばかりになり、自信につながったという。

高校の同級生、特にブラジル人の友人の中には、工場で働き始め、高校を中退していく人もいた。そうした周囲の人たちに流されないように自分を律して、大学進学を目標にしたようだ。高校での成績は良かったので、推薦を受けて大学進学は可能だとは思っていたが、「安易に合格しても、大学での勉強についていけない」と思い、一般入試での合格を目指して予備校にも通った。

高3になると、土日にもかかわらず、近くの喫茶店に高校の先生を呼び出して、勉強を教えてもらった。「今から思うと、先生たちは大変なことをさせたけれど、イヤな顔ひとつせず、出てきて、僕を助けてくれたんですよ」と回想する。

大学は、結局、指定校推薦を受けて、県内の私立大学工学部に合格。高3の秋には合格が決まったが、卒業まで予備校にも通い、勉強は続けた。大学での勉強についていける学力をつけておきたかったからだという。

また、K高校は様々な背景をもつ生徒たちが在籍しているだけに、特別活動も盛んだったようだ。特に、外国にルーツをもつ生徒たちの母文化・母語の保障にも力をいれていたようで、彼自身、ブラジル人としてのアイデンティティを見直す3年間にもなったという。

エドワードにとっても高校時代は人生の大きな転機となった。高校に入って、サッカー部に入部して、練習にあけくれていた。しかし、高1の終わりに体調不調に悩まされるようになった。ある日、鼻血がとまらなくなり、病院で診察を受けると白血病だった。

骨髄移植は受けることができず、化学療法で7ヶ月の入院生活を送った。中学、高校の友人たちが千羽鶴を折って励ましてくれた。治療は苦しかったという。

「抗ガン剤だから、もう、吐いて、吐いて、吐きまくって。「もういやだ！」って言ったら、お父さんが、ポルトガル語でしたけど「神様は乗り越えられない苦しみを与えない」って言ったんです。そして、その日にサッカー部からのコーチから来た手紙を読んだら、日本語で同じ言葉が書いてあったんだよね。「そうか」って思って、苦しい治療も我慢した」

好きだった運動は一切できなくなったが、もう一つの特技、絵を描くことで気晴らしもした。

「日本に来て、成績が悪かったから、絵が得意だったのはずっと救いだったんですよ。他の科目は悪くても体育と美術だけは5がとれた。だから、病院でもよく絵を描いていました。」

当時、描いた絵は、今でも彼の自宅のあちこちに飾ってある。

弟のフェルナンドは当時から2。「ずっと一緒に頑張ってきたエドワードが死んでしまう」と泣きたい思いをこらえて、兄を見舞い、看病で大変な両親を支えようとしたと振り返る。

幸い、治療が効果をあらわし、7ヶ月で退院、1年遅れたが高校にも復学した。「病気になることが、人生を大きく変えたんだよね。考え方もそうだけど、もっと、いろいろ具体的に変わった。あのね、僕は、中学のときに、英語科に行きたかったけれど、成績が足りなくて、普通科に行ったでしょ。1年遅れたら、その学年の英語科が定員割れしていたんだよね。だから、英語科に編入できた。好きな英語をたくさん勉強できたでしょ。それから、僕、大学には推薦入試で来たけれど、僕が受けた年にはじめて推薦入試をやったんだよね。病気がなかったら、僕は推薦は受けられなかった。一般入試では、僕は今の大学に合格はできなかったと思う」（エドワード）

白血病は寛解後5年の経過観察が必要であるが、2008年の秋にその5年をむかえた。

弟のフェルナンド自身は、順調な高校生活を送ったようだ。サッカー部でボールを蹴り、友人にも恵まれ、成績も悪くはなかったという。英語教師になりたいという将来の希望を叶えるために、自宅からさほど遠くない私立大学に推薦で合格を決めた。

(6) 大学時代・職業を決める

パウロは、大学では応用化学を専攻した。大学の講義は友人の助けを受けながら乗り切り、学費は奨学金でまかなった。学外の活動では、外国にルーツをもつ子どもたちのための日本語教室、学習教室、進路説明会などに積極的に関わったという。多くの人に助けられて自分も大学進学を果たしたという気持ちがあったので、「恩返し」のつもりだったようだ。

大学3年生の冬からは就職活動も行い、内定もとったが、4年生の6月に母校、K高校でやった教育実習が再び人生の転機となった。「教師の仕事は大変だけど、やりがいのある仕事だ」と思い、内定を断って、教員になることを目指すことにした。教員採用試験は日本人でも難関であることから、母親は反対

したが、それをふりきっての決心だった。

勉強不足で現役での教員採用試験合格は果たせず、臨時採用の職を求めることにした。卒業後1年間は養護学校での実習助手（これも人生観を変える経験だったと話す。通信教育で養護教諭の免許も取得した）、そして翌年は実業高校で工業化学の臨時教員として働きながら、採用試験の準備をした。そこでは周囲の理解もあり、試験が終わるまでは担当授業を軽減してもらい、試験勉強に専念した。その甲斐あって、1次試験に合格。2次試験のために、他の先生たちに助けを求め、模擬授業をみてもらったり、自己PR文の添削をしてもらったという。結果、見事、最終合格、2008年4月から昨年度から臨時講師として働いていた高校の正規職員となって元気に仕事をしている。

一方、エドワルドとフェルナンドは、まだ大学生である。2人とも英語を専攻言語としている。エドワルドの通学時間は片道2時間。しかし、「僕、まだ、授業、一回も休んだことないですよ」という。英語の教員免許取得を目指しての教職課程のほか、日本語教員課程も履修しており、他の専門科目とあわせる、1週間の時間割はかなりタイトなものとなっている。

フェルナンドも教職課程を履修していて、授業だけでも、結構、多忙な日々を送っている。さらに、二人ともサッカー同好会、学内サークル、アルバイトなど、予定はびっしりの状態だ。

その中でも、特に二人がが現在学業以外に力を入れているのが、ブラジル人のための日本語塾である。在日10年以上になる父親が日本語で苦勞しているのをみて、日本語を教えることを思い立った。自分たちの経験から、「言葉ができないと友だちもできない、日本人の友だちができないと、日本を理解することもできない」と思うからだ。

当初は、エドワルドが家庭教師として父親の友人宅を巡回していた。しかし、希望者が増えたので、塾形式にすることとし、現在は倉庫を改造した建物を使って、毎週土曜日、合計70名ほどの生徒に日本語を教えている（午前中と夕方に合計5クラス）。自分たちが日本語習得に苦勞した経験を活かし、教材は徹底した手作りですべてを展開している。常に教材研究ノートを持ち歩き、何かアイデアが浮かぶと書き留めているという。

「本だと丁寧な言葉でしょ？でも、ブラジル人はみんな工場で働いている。そこでは、「俺、明日、遊びに行くよ」というような日本語が使われてるでしょ？ブラジル人に必要なのは、そういう日本語」という考えから、口語体の日本語を教えている。

また、弟のフェルナンドは、同じ建物を使って、ブラジル人の中学生4人に対する補習をやっている。「高校進学したい」という生徒たちが国語の時間に取り出され、別のことをしていると知り、かれらの在籍中学に電話をして、国語の授業に参加させることを要望を出したそうである。「国語の授業でついていけるように予習を塾でやっている。日本ででの生活が長くなっている子どもたちを更に特別扱いするのはよくない」と考えてのことだった。

彼らの塾は県内のマスコミで取り上げられ、最近では全国放送の番組にも出演依頼がある。外国人のための日本語教室は各地にあるが、当事者が主宰している教室は珍しく、また、それが大学生の若者がやっているということで、多くの人々の関心を集めている。そして、彼らのそばには、常に父親と母親のサポートがある。

現在、2人は、大学卒業後の進路について、大きく迷っている。2人とも元々は英語教師を目指していたが、「先生になる前に、一度、企業につとめてみようか。このまま、塾をやろうか。先生を目指して、そのまま頑張るか」などである。まだ、卒業までに、時間的余裕があるので、「ゆっくり考えたらいい」とも思っているようである。

4. 考察

前節では、かなり詳細に3人の生活史を紹介した。3人とも「モデル」的なケースであり、彼らの事例から一般化をすることはできない。しかしながら、彼らが一定の教育達成を果たすことができた条件を仮説的に提示してみよう。

①親のサポートの存在

3人とも親のサポートに励まされたことを繰り返し語る。親たちは、単に「頑張れ」と励ますのみならず、自らも努力する姿を見せている。子どもと一

緒に公文に通う、日本語を独学で勉強する等である。さらに、パウロの母親はブラジルでは看護師だった。日本ではその資格は使うことができないため、ヘルパーをして働きながら、独学で勉強し、日本の看護師国家試験に合格した。パウロはそのことについて「刺激になりましたねえ。僕も負けられないって思いました」と語る。

また、親が工場労働で一生懸命働いて帰ってくる姿も彼らにとっては、大きな励みになったという。エドワルドは「僕らが日本にくる前、お父さんの会社がつぶれてしまって。生活は本当に苦しかったんです。日本に来て、お父さんとお母さんが働いてくれるおかげ、そういう貧乏な感じはなくなった。でも、ブラジルではお父さんもお母さんも、もっときれいな仕事をしていたんだよね。2人が、工場で汚れた服を着て帰ってくるのをみて、僕らも泣いている場合じゃないって。お父さんが一度だけ言ったんですよ。「エドワルド、フェルナンド、今、ここで勉強すれば、こんな汚い服で仕事をしなくてもいいんだぞ」って。重かったですね」と語る。

親が日本で苦勞しても一生懸命、学び、働く姿に影響をうけて、3人は努力を続けたことが、彼らの語りから読み取ることができるのである。

エドワルドとフェルナンドの母親・マルシアは「親として当たり前のことをしただけ。多くのブラジル人はね、「お金、お金、お金」ってなってしまうって、残業をたくさんしようとする。でも、それが子どもに伝わるような生活じゃないんだよね。私たちは、子どものことを一番に考えて、2人が必要な時は、お金が減ってでも、2人の世話をしたね。それが、よかったかな」と振り返っていた。

②同じ境遇の仲間の存在

親のサポートのほかに、同じ境遇でともに苦しみ、また励まし合う同年代の仲間の存在も大きい。

パウロの場合は、妹や先に来日していたいとこまた、似たような背景をもつ高校の友人たちとともに、エドワルドとフェルナンドは兄弟で常に共に励まし合ってきたことが語られる。そして、お互いが影響をうけあいながら、将来像を描いていったことがうかがえる。

ブラジル人の子どもたちの場合、多様な進路モデルが存在していないことが、教育達成（職業地位達成）に結びつかない要因のひとつだと考えられる。親たちの多くは、工場などでの単純労働従事者であり、子どもたちにとって、それより「上」の職業モデルは、派遣会社や市役所などでの通訳や嘱託職員くらいしかないのである。

「将来？だって、どんな仕事があるのかわかんないもん。会社だけはイヤ、無理」ブラジル人の子どもたちが時々こんなことを口にするのを耳にする。このときの「会社」は親たちが働く工場を示している。

したがって、子どもたちに多様なモデルを示すことの重要性は認識され、そのために、各地で「外国につながる子どもたちのための進路説明会」が開催され、先に進路をきりひらいた先輩たちから話しを聞く機会がつけられている。しかし、どうしても「身近」には思えないようだ。

本稿で扱った事例は、モデルがいとこや学校の仲間として存在していたり、兄弟で励まし合いながら、自らの将来像を形成していったというものである。お互いに影響をあたえあっていることがよくわかる。

本人たちのほか、パウロのいとこのうち、姉は看護師としてオーストラリアで活躍中であり、弟は大学を出てSEとして仕事をしている。一緒に来日した妹は短大を出て、栄養士として働いているようだ。

エドワルド、フェルナンドも「今、いところが大学を目指して頑張っているんです。今、高3。彼女、はじめは高校も行きたくないって言ってたけれど、僕らが「高校くらい行かないでどうするんだ」って言ったら、「じゃあ、高校には行くだけ」っていう感じだったんですけれど。でも、段々、やる気になってきて。今は、大学に行きたいって思っているようで、この前も、僕らが色々アドバイスしてあげました」という。

③教師のサポートの存在

3人それぞれ、時期は異なるがパウロは高校時代の先生方、エドワルドは中学時代の担任、フェルナンドは小5・6の担任一学校の教師との出会いが、それぞれの人生にとって大事だったと語る。

一般的に教師たちは「ブラジル人でも特別扱いはしない」という態度をとるか、「ブラジル人だから仕方ない」とあきらめの態度をとるかどちらかになりがちである。前者は「平等」に見えるが、ブラジル人の子どもたちが抱える課題（言葉、文化など）に配慮しないことにつながりがちである。

しかし、3人が語った教師の思い出から見えてくるのは、彼らの背景に十分な目配りをしながら、他の日本人の児童・生徒同様に扱うという態度である。たとえば、エドワルドの中学時代の担任は、エドワルドを他の日本人と同じように漢字テストに参加させ、ハンディの大きい国語の試験などでも特別扱いはしなかった。しかし、きっと、常にエドワルドを気にかけていたのであろう。中3になり、エドワルドが初めて国語で平均点をとったときのエピソードは、それをよくあらわしている。

当然のことながら、教育達成には学力の保障が前提条件になる。多くのハンディをかかえる外国人の児童・生徒にとって、どのような教師に出会うかが一つの重要な条件となることは間違いない。

④個人の努力

上にあげてきた条件とならんで、個人の努力は必須条件となる。3人の生活史から明らかになるのは、どんなに困難でもあきらめずに日本での勉強を続けた姿である。「1日3時間は勉強していた」とエドワルドは中学時代を振り返るが、理解できない授業のために毎日勉強を続けるのは苦痛であったにちがいない。それでも両親の「今はこの道しかない」という言葉に従って、努力を続けた姿が生活史から明らかになる。パウロやフェルナンドの生活史からも同様の姿が浮かびあがるであろう。

⑤母文化へのアイデンティティ

ブラジル人であることのアイデンティティの保障も重要な要件である。「ブラジルでは日本人って言われて、日本ではブラジル人って言われる。」このようなアイデンティティの揺れを彼らも口にはするが、同時に今は二つの文化をもつことを強みにして、活躍している。

パウロは高校時代の特別活動を通じてブラジル人であることを確認したと語り、大学時代には外国人の中高生を支援する活動を行った。教員となった今も「ブラジル人として頑張ってきた姿を見せたい」とも語る。

エドワルドとフェルナンドはポルトガル語を使いながら、日本語を教えている。「自分たちだからこそできること」とバイリンガルであることの強みを強調する。

母語、母文化を継承していること、④にあげた「自力主義」を支える要因にもなっていると考えることができよう。

5. 今後の課題

本報告では、一部の「成功例」をとりあげて、彼らが「成功」した条件を考えてみた。しかし、実際、多くのブラジル人の子どもたちの将来は決して楽観的なものではない。日本語保障、学力保障、進路保障など、様々な課題が山積しているのが実情である。

しかし、第二世代がいかに日本社会に参入していくのかという問題は、社会統合の問題とも関わりあって重要な問題である。今後も事例を集めながら、分析を深めていきたい。

引用・参考文献

- 浅田秀子, 2005. 「地域社会の国際化と共生 - 愛知県公営住宅の事例を中心に -」愛知淑徳大学大学院提出博士論文
- 池上重弘編著, 2001. 「ブラジル人と国際化する地域社会」明石書店.
- 池上重弘, 2002. 「地域社会の変容とエスニシティ」, 梶田孝道・宮島喬編, 「国際化する日本社会」東京大学出版会所収.
- Castels, S. & Miller. M. J., 1993, *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*, London; Mcmillan. (= 1996, 関根政美・関根薫訳「国際移民の時代」名古屋大学)
- 見島明, 2006. 「ニューカマーの子どもと学校文化」勁草書房
- 駒井洋, 1993. 「外国人労働者定住への道」明石書店
- 駒井洋編著, 1995. 「外国人定住問題資料集成」明石書店
- 駒井洋編著, 1996. 「日本のエスニック社会」明石書店.
- 小内透・酒井恵真編著, 2001, 「日系ブラジル人の定住化と地域社会」御茶の水書房
- Portes, Alejandro & Rubaunt, Ruben, 2001. *Legacies: The Stories of the Immigrant Second*

Generation; University of California Press

- 酒井アルベルト, 2005, 「デカセギの15年—日系生を生きる道—, 桜井厚編, 「戦後世相の経
験史」せりか書房所収
- Tsuda, Takeyuki., 2003, Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective; Columbia University Press.
- 都築くるみ, 1996, 「日系ブラジル人受け入れと地域の変容—愛知県豊田市H団地を事例として—」, 駒井紘所収.
- 都築くるみ, 2003, 「在日ブラジル人を受け入れた豊田市H団地の地域変容」『フォーラム現代社会学』2:51-58.
- 西田芳正, 1996, 「文化住宅街の青春—低階層集住地域における教育・地位達成—」谷富夫編
「ライフヒストリーを学ぶ人のために」世界思想社所収
- 松宮朝, 2003, 「愛知県西尾市におけるブラジル人の生活実態とその定住化(2)」『社会福祉研究』5:67-74.
- 松宮朝, 2004a, 「外国籍住民の増加と地域再編(1)—愛知県西尾市を事例として—(1)」『愛知県立大学文学部論集(社会福祉学科編)』52:105-124.
- 松宮朝, 2004b, 「外国籍住民の増加と地域再編(2)—愛知県西尾市を事例として—(2)」『社会福祉研究』6:45-56.
- 松宮朝, 2005a, 「「ニューカマー」の子どもたちへの地域教育支援」『愛知県立大学文学部論集(社会福祉学科編)』53:169-186.
- 松宮朝, 2005b, 「外国籍住民の増加にともなう県営住宅の現状と地域的展開(1)」『社会福祉研究』7:63-70.
- 宮島喬, 1999, 「文化と不平等—社会学的アプローチ—」有斐閣
- 宮島喬編, 2007, 「外国人児童・生徒の就学問題の家族的背景と就学支援ネットワークの研究」平成16-18年度科学研究費補助金(基盤B)研究成果報告書
- 村井忠政, 2003, 「共生をめぐる若干の疑問」『多文化共生年報』1:4-21.
- 山本薫子, 2000, 「「定住化する外国人」とは誰か—法的滞在資格との関連で—」『社会学論考』:21-43
- 山本かほり, 2003, 「愛知県西尾市におけるブラジル人の生活実態とその定住化(1)」『社会福祉研究』5:55-66.
- 山本かほり, 2004a, 「外国籍住民の増加と地域再編(1)—愛知県西尾市を事例として—(2)」『愛知県立大学文学部論集(社会福祉学科編)』52:125-142.
- 山本かほり, 2004b, 「外国籍住民の増加と地域再編(2)—愛知県西尾市を事例として—(1)」『社会福祉研究』6:35-43.
- 山本かほり, 2005, 「外国籍住民の増加にともなう県営住宅の現状と地域的展開(2)」『社会福祉研究』7:71-81.
- 山本かほり&松宮朝, 2006, 「地方都市におけるブラジル人住民の増加と地域再編過程—愛知県西尾市の事例から—」『多文化共生研究年報』3:3-27
- 山本かほり編, 2007, 「外国籍住民の増加と地域再編—東海地方を事例として—」平成16年度~18年度 科学研究費補助金基盤c 研究成果報告書
- 山本かほり, 2007, 「定住への模索」村井忠正編「トランスナショナル・アイデンティティと

多文化共生－グローバル時代の日系人－」明石書店所収